

かかと 木村多江

「女優」とは優れた女と書く。

テレビに出ているみなさんは、目がパッチリと大きくて、かわいい人ばかり。それに比べて自分ときたら、目がちっちゃい！

モニターに映る自分の目は、実物以上に小さく見える。ずっと気にはしていたけれど、他人から見ても、やっぱりそうだった。

「なんとか、なんないの？」

担当のマネージャーは社長から言われたそう。もちろん、目の小さなことを指して、もっと言えば、テレビ映りの悪さについても。マネージャーも、テレビに映るわたしの顔を観て、「しゃもじ、みたいだなあ」と思っていたそう。

わたしの顔には、立体感がないのである。

次にトライしたのが髪型。そのとき行き着いた髪型が、前髪を使い、奥二重の目を隠し気味にすることだった。しばらくはそのスタイルでおした。

しかし、コンプレックスは顔だけでは終わらなかった。

顔の次はスタイルが待ち受けていた。「胸がハト胸**っ**ぱいから、もうちょっとふくらみが下にこないかな」「けっこう、肩幅が広いよね」と、好き放題に言われた。

そんなことは、言われなくても、わかってるんだよ——！っていうか、どうにもならないだろ——！

いつのころからか「不幸な役が似合う女」と言われるようになった。

決定的だったのは、やはり『リング～最終章～』の貞子役だったかもしれない。それ以前にも死ぬ役が多く、それ以降も不幸な役が多かったが。

役のうえでは「不幸」続きで、みなさんから「不幸な役が似合う」と言われることに、内心では「面白いな」と思ってもいた。

なぜなら、わたしは幸せじゃないって思うことはたくさんあっても、不幸だとは、**思っていない。**

それに、不幸といえば「木村多江」と言ってもらえるようになり、そのことで名前を覚えてもらえるようになり、とてもありがたかった。

「この不幸な役は木村多江しかいないね」と、仕事をいただけたら、役者冥利につきる。

わたしの実感では、身体をケアしているだけではだめで、並行して心のケアをしておかないと、効果が薄い気がする。つまり、心がカサカサしていると、かかとも自ずとカサカサになる。心と身体は、しっかりつながっているようです。

心のゆとりが、身体をつくっている。

ゆとりがなければ、「今日はちょっとかかるとクリームでも塗ろうかな」という気分にはならない。

ゆとりがあって、身体のケアもできていれば、人は気づかなくても、「わたし、今日、ちょっときれいになった」と思えるし、そういう気分のときに人に会えば、人にやさしくもなれた。

妻の匂い

出産後、しばらくはいくら台本をめくってみても、台詞が入ってこなかった。内容さえ頭に入ってこない。

一度読んだ箇所も、次の日には「あれ？どんな話だったけかな」となる。もう一回読み直すのだけれど、一晩寝ると、また記憶が薄まっていて、記憶がなかなか定着しなかった。1ページ覚えるのに、5日かかるようなこともあった。

あまりに覚えられなくて、本気で悩んだ。こんなに台詞が覚えられなくて、わたしは仕事ができるのだろうか、商売あがったりだと。

でも、覚えるしかないので、ひたすら台本を読んだ。繰り返し、繰り返し読んでいるうちに、なんとなく身体が台詞を覚えることに馴れてきて、自分がどうやって台詞を覚えていたかを、徐々に思い出し始めた。

ああ、それでもドラえもんの暗記パンが欲しい。